

となつた。

今回の特別講演は石田純郎氏「アジア医史跡散歩」である。海外に出る医学関係者は多いが、系統的に医学史跡を訪れ、それを記録してガイドブック的な商業出版にまで持っていけるのは石田氏以外にはいないのではないか、今回はとくに邦人の訪問も少ないアジア各地の医史跡について多数のスライドを用いて紹介された。

当日は一般演題六題の発表もあり、丁々発止の討議が行なわれた。

本年は十月十四日・十五日に京都市で第百一回日本医史学会が行なわれ、それから一ヶ月も経っていなかったが、多くの会員の参加があり、熱気のこもった活気ある学会になったことをよろこびたい。

### 例会抄録

#### 橋本伯寿『断毒論』の刊行年について

深瀬泰且

橋本伯寿は『断毒論』をあらわして、痘瘡や麻疹、梅毒、疥癬が伝染病であることをはじめて唱えて、世に警鐘をならした。これはそのころの慣習による漢文表記の著述であるが、広く読んでもらうために漢字仮名混じり文であらわすことの

必要を認識して、漢文を国字になおして発刊した『翻訳断毒論』や『国字断毒論』もある。これによって三種、五冊の流布本が現存している。しかし『国書総目録』をはじめ各種の目録をみると、三種の刊本の扱いや、刊行の年が区々であることに戸惑いを感じることもある。

これら三種の『断毒論』は、書名の相違からそれぞれ独立に発刊されたと考えるのが現今の通説のようであるが、『断毒論』を書誌学的に考察することによって、これらが『断毒論』と『翻訳断毒論』のグループと、『国字断毒論』にわけて刊行されたと考えられるものである。なお本論においては山崎本(順天堂大学山崎文庫所蔵)と、北里本(北里研究所東洋医学研究所所蔵)を考察の対象とした。

『断毒論』の封面には「三巴先生著／断毒論 全 附翻訳一卷／東都書肆 文刻堂 慶寿堂 発行」としてなされている。この「附翻訳一卷」の意味するところを、伯寿はどのような意図で記載したのかにまず考察をくわえたい。

『断毒論』の凡例に「前編ハ句読ヲ加工、後編ハ国字ヲ以テ之ヲ訳ス」とあるように、漢文をもってあらわされた二冊が前編であり、国字をもってあらわされた附録は後編であるという。伯寿自身は三冊をもって一連の刊行物であるとの認識をもっていた。

北里本の題箋には「断毒論 天」と「断毒論 地」、そして「翻訳断毒論 人」と記載されている。書名は異なるが「天地人」と一括して表記していることは、これらが三冊本である

ことをしめしている。

北里本『翻訳断毒論』の大尾につぎのような近刊案内がふ  
 されている。「この書統編ともに全部となして発刊すべきを、  
 ……知己のすすめいなみがたく先この三巻を前編とせり」と  
 あつて、一日でも早く刊行して非命にたおれる人をすくなく  
 したいとの意図で、『断毒論』（二冊）と『翻訳断毒論』をあ  
 わせた三冊を一括して発刊したという。

一方『享保以後江戸出版書目』にのる「割印帳」には、  
 〈文化八年末六月二十五日割印〉

行事

(省略)

文化七庚午年八月

断毒論 全三冊 橋本保節著

版元売出

西村源六

墨付百壺丁

松本平助

とあつて、明らかに三冊本として文化七年に発刊されたこと  
 をしめしている。

このような認識にたつと、封面あるいは扉、序文は『断毒  
 論 天』にはあるが、『断毒論 地』や『翻訳断毒論』には欠  
 けており、一方刊記は『翻訳断毒論』のみに見られる状況は  
 容易に理解できる。よつて『翻訳断毒論』の末尾にしろるされ  
 た「文化七庚午八月朔」（山崎本）、あるいは「文化辛未秋発兌」  
 （北里本）をもつて『断毒論』三巻の刊行年とすべきと考え  
 る。さらに厳密に表記するならば、「文化七年刊」あるいは「文  
 化七年刊・文化八年修」とすべきであろう。

伯寿は「断毒論」を当初四冊本として発刊する意図をもつ

ていたが、結果的には五冊本となった。すなわち第四冊目の  
 「断毒論」として『統編断毒論』とする意図をもつていた—  
 —山崎本『断毒論』の巻末に『統編断毒論』について「嗣  
 刻」とある—が、おおくの読者を獲得するためには「統編」  
 だけでなく、通説に便利な二冊本として発刊する方策をとつ  
 たにちがいない。この際書名は『国字断毒論』、『国字断毒論  
 附録』と改変された。

しかし『国字断毒論』の二丁以下は『断毒論』の版木  
 をそのまま使用したので、版心題も尾題も「断毒論」と  
 いう書名がのこるという無様な刊本が流布することになつて  
 しまった。そのため『国字断毒論』の巻末にある「文化七庚  
 午八月朔」の刊記は信用できない。入れ木によつて修正した  
 北里本の「文化十一年甲戌秋七月」の刊記から、本書が文化  
 十一年に発刊されたとすべきである。

おわりに北里本の披見をゆるされ、かつご懇篤なご指導を  
 いただいた北里研究所医史学研究室小曾戸洋先生、町泉寿郎  
 先生に感謝する。  
 (平成十二年四月例会)

### 火薬の発明と中国伝統医薬学

小曾戸 洋

中国伝統本草の特徴の一つに薬物の配合(複合)を重視する  
 ことがあげられる。この考えによつて中国伝統医学では単味